

日本放送作家協会賞

第11回 日本放送作家協会賞

放送作家賞

昭和46年5月20日 於ホテル・ニュージャパン

協会賞



協会賞、ブロンズ像

この像は、柳原善達先生造型による「明日への希望」を表わしたものです。左手に持つ「ふたば」は出発点の意。

この賞を得て、改めてこれを起点として精進していただきたいという願いをこめて、造られたものです。

選考経過

第十一回日本放送作家協会賞は、年間三回にわたる協会のアンケートから、票数上位の候補をピックアップして各部門委員会（委員名は別掲）にかけ、最終審査をおこなった。

優秀番組賞では「日本史探訪」（NHK）、「永六輔の遠くへ行きたい」（テレビマン・ユニオン）、「みなしごハッチ」（竜の子プロ）等も候補としてあげられたが、結局、人間性を融いあげたユニークなシリーズとして「人間の歌シリーズ」（木下恵介プロ）、単発ながらドキュメンタリーでは出色の作品ということで「Uボートの遺書」（NHK）の二本に決定した。

演出者賞のラジオ部門は、全員一致で文化放送「ジャンボ・アフリカ」の鈴木久尋氏に決定。テレビ部門では、吉田直哉他（橋ノ木は残った）、岡崎栄（遺書配達人）、山本和夫（東芝日旺劇場）の各氏も有力候補にあげられた。これまではドラマの演出に主体がおかれていたが、バラエティ・ショーも将来のテレビにおいていよいよ比重の加わることが予想されることから、今回はそのパイオニア的存在の末盛憲彦氏（NHK、ステーション〇一）に賞を贈ることになった。男性演技者賞では、最終に「二丁目三番地」他の藤村俊二、各ドラマの役柄をわきまえた演技の児玉清、「こけっこー」他の堺正章が残ったが、結局「こけっこー」における

堺正章は、パーソナリティ以上の演技だという評価になり、その他の活躍も含めて、今回の賞に決まった。

女性演技者賞では、演技賞の性格から、ベテラン女優の名をあげるアンケートが多かったが、経歴を度外視し今年度だけに評価を限るという基準から、最終的に「オランダおいね」の丘みつ子と、「人喰い」泣虫小僧「0の焦点」の十朱幸代が残った。丘みつ子を推す声はその新鮮さ、十朱はパーソナリティ偏重の風潮の中にあって、しっかり役を構築し「女」を演じていたという理由、結局「女」を演じた十朱幸代に票が集まった。

大衆芸能賞の演芸部門は、芝居囃を十二巻の映画にした林家正蔵、話芸の進境目ざましい金原亭馬生、その他柳家小さん、てんぷくトリオ、玉川勝太郎、かしまし娘などが有力候補として残ったが、委員の決戦投票の結果、昭和三十四年から十二年間、古典落語を守り続けている東京落語会に決定をみた。

同じくショー部門は、候補者が多彩にわたり、審査は最終まで難行したが、ワンマンDJの草分けともいえる糸居五郎の、終始かわらない情熱と、巧みな話術に、最高票が投じられた。

CM作品賞は、アンケート上位の十作品で最終審査がおこなわれた。討議を重ねた末、「キンビール」「資生堂」「ハウス食品」の三点に選ばれ、決戦投票の結果、品位あるユーモアと、大衆性という点で「ハウス食品」に賞を贈ることになった。

優秀番組賞

「人間の歌シリーズ」

木下恵介プロダクション



「冬の雲」の一場面

人間性讃歌の

ドラマ

久板栄二郎

「人間の歌シリーズ」は「冬の旅」「俄」「椿の散るとき」そして「冬の雲」とつづく、落ちついた夜の深い時間帯の連ドラである。

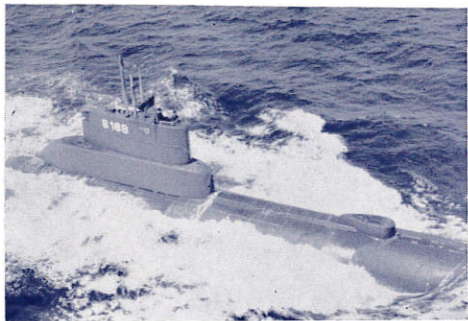
一例を現在もお進行中の「冬の雲」に見るに、複雑な家族構成をもつ一家に焦点をしばらくしながらも、今日を誠実に生きぬこうとする人間たちの、愛、苦悩、悲しみ、挫折、勇気……さまざまな心の屈折を、温かい眼で、しかも、厳しい選択をせまりつつ闊達に描き、多くの視聴者の共感と呼んでいる。今日の世相がみずみずしく描かれていることも、また、視聴者の魅力である。

とかく、スタジオ・ドラマ——とりわけ、現代をその中で扱うことの困難さが敷かれているとき、むしろ、その困難に立ち向かい、スタジオ・ドラマの枠ぎりぎりのところで、「木下恵介アワー」「人間の歌シリーズ」と、優れた作品を次々と制作してきたこのプロダクションに、私たちは、心からの拍手をおくらずにいられない。

優秀番組賞

Uボートの遺書

N H K



「Uボートの遺書」

第二次大戦末期、Uボートでドイツから海軍の技術情報を日本へ運ぶ途中、ドイツの降伏により北大西洋上で自決した二人の日本軍人の記録を、海軍大佐庄司元三氏の遺書を軸に、その遺族、Uボートの関係者らの証言を採って再構成し、戦争下の人間の死生観や、才月、戦争と平和、世代の断絶、インテリとテクノロジ等の問題をあらためて追求し、世に問うた異色のドキュメンタリー。

一番印象に

残った作品

寺島アキ子

昨年一年間に見たテレビ作品のなかで、一番印象に残ったのが、この「Uボートの遺書」でした。

最初の放送で見て、再放送も見て、少しも飽きませんでした。こんなことは本当に珍しいことです。

今になって思い返してみると、ややNHK的客観主義がテーマを散漫にしていたくらいいもなきにしもあらずですが、でも、「戦争とは何か」「平和とは何か」「生きる」ということは何か」考えさせられた作品でした。

ドラマを書いている人間のくせにこんなことを書くのはとても残念ですが、でも、昨年放送されたテレビ作品のなかで、このドキュメンタリーに、一番ドラマチックなものを感じました。

演出者賞

(テレビ部門)

末盛憲彦

N H K



末盛憲彦氏は、昭和4年生まれ。慶応義塾大学経済学部出身。昭和31年NHK入局以来主として音楽バラエティ番組を担当。同氏の手がけた主な番組は次の通り。
「午後のおしゃべり」34、36年
「夢であいましょう」36、41年
「音楽の花ひらく」43年
「ステージ101」45年、現在ほかに「銀座の山賊」「万博ショー」などの単発番組も制作している。

輝かしき先駆者

伊馬 春部

徹底したエンタテイメントでありながら、どこか高雅な香気を漂わせていた八夢であいましょうVは、数年後の今でもなお懐しいが、じつはこの八夢メアIVがテレビバラエティ演出家としての末盛憲彦の名を不動のものとしたのである。

この人ほどスター造り、ヒットソング造りに長けている人はまずあるまいと、よく云われるが、それは続く八音楽の花ひらくVから八ステージ101Vとエスカレートした今日においても変ることなく、既成タレント依存を排するのが建前の八101Vからでさえ、早くも新スターが生れつつある。

どこにその秘密があるのか。おそらくこのひと生得の誠実さと卓抜した演出力が、おのずから芸能タレントたちの信頼をひろくかち得るからこそに相違あるまい。

ヤングのバイタリティみなぎる八101Vが、さらに新風旋風をまき起こすことを期待しつつ、このバラエティショーのパイオニアに改めて敬意を表し、且つ祝福を贈るものである。

演出者賞

(ラジオ部門)

鈴木久尋

文化放送



鈴木久尋氏は、昭和6年生まれ。学習院大学政経学部出身。昭和30年文化放送に入社以来、「少年ケニヤ」「少年猿飛佐助」など児童向けの連続ドラマや、現代劇場の演出を担当。その他、同氏の主な番組は次の通り。

「中村錦之助アワー・宮本武蔵」
「歌謡大行進」
「松本清張シリーズ」
「淀どの日記」
「憂愁平野」
「ラジオ特集」
芸術祭「日本のユリシーズ」
小笠原からあなたへ「夕陽を生きるべし」
「ジャンボ・アフリカ」

貴重な演出者

大林 清

ラジオドラマの演出者としての鈴木久尋さんに賞を贈るのに、この年度の業績だけを対象とするのは妥当でないかも知れない。芸術祭参加作品だけを取上げてみても、このところ数回連続入賞の栄誉を獲得されているし、その中にはグランプリに挙げられた「小笠原からあなたへ」(川崎洋作)もあった。

今回の「ジャンボ・アフリカ」はラジオ・ドラマとしては画期的なアフリカ現地ロケまで敢行した作品だが、そのまとめ方のみごとさは、これまでの演出技術の蓄積を土壌として開花したものであり、これに賞を贈ることは多年の努力と業績を讃えることにほかならない。

ラジオにおけるドラマ番組は、近年その質的向上にもかかわらず、放送コマ・シャリズムに疎外されつつある。その孤塁を守って奮闘する鈴木さんのような優れた演出者はきわめて貴重で、更に今後の精進活躍に期待するところが大きい。

男性演技者賞

堺 正章



堺 正章(さかい・まさあき)
昭和21年8月6日生れ、父は喜劇俳優だった故堺駿二氏。

はじめ、グループ・サウンズのザ・スパイダースに参加し、ハマチャアキVの愛称で人気を得、テレビ・タレントとしては「守るも攻めるも」「時間ですよ」「こけっこー」「日曜8時突って頂きます」などで親しまれている。また、映画では「男の紋章」(日活)、「右むけ左」(東京)に出演、歌手としても活躍している。

現住所、東京都世田谷区代沢
2-12-1

// 感覚演技 // の旗手 マチャアキ

松本 重美

「ほく個人の意見だが、「テレビとは？」と問われたら、「フリーリングだな」と答えようと思う。作家であれタレントであれ、今後プロとしてテレビの制作現場にかかわって行くための必要条件は、まず「感覚人間」に徹することではないかと考えている。

マチャアキこと堺正章氏は一〇〇パーセント感覚人間である。ブラウン管の中で彼は、常に感覚のひらめくまま衝動的に行動する。それはまったく「行動」であって、「演技」もしくは「役づくり」と呼ばれる作業とは異質のものかも知れない。だが、彼の行動の映像は、たしかに実在感をもって受け手に迫るのだ。今回の受賞対象作品、特に「こけっこー」の中で彼は、現代の若者の心情——甘えと傲慢、有情と非情、純粋性と打算性などの矛盾する要素が常にゆれ動きつつ共存する若者の内面を皮膚感覚でうけとめ、突発的飛躍的に行動することによって、生々しい実像として表現してみせた。感覚人間ならではの成果だし、従来のパターンを脱した新しいテレビ演技の芽生えがそこにあるとさえ思われる。今後、彼が妙に「演技」づいたりせず、ひたすら感覚をとぎ澄ましつづけてくれるよう、ぼくは祈っている。

女性演技者賞

十朱 幸代



十朱幸代(とあけ・ゆきよ)
本名、小倉幸子。父は俳優の十朱久雄氏。

昭和17年11月23日東京生れ。文化学院英語科卒業。

6才の頃、劇団メイフラワーに参加、初舞台を踏んで以来、放送、映画、舞台などで活躍。主な出演番組には、NHKテレビ「バス通り裏」「あひるの学校」「0の焦点」、NTV「火曜日の女」(東宝制作)、「泣虫小僧」(CAL制作)などがある。現住所、東京都品川区小山7の9の13

「女」の演技

岡本 克巳

何とかその時を思い出そうとするのだけれど、なかなか思い出せない。彼女がまだ少女で、私が文字通り駆け出しだった頃、たしか私は、彼女の一番最初のラジオ・ドラマを書いたよ。うだ。十朱さんのお嬢さんで……という、七光りでの配役だった。そのドラマのタイトルも今思い出せないのだが、どうせ七光りならと思った予想を裏切って、「おやっ」と思ったことだけは覚えている。それから何年か経って、またラジオ・ドラマで会った。テレビのキャストイングの話の中で、何度も彼女の名をきいたから、私にしてみるとずっとお馴染みだったのだが、その実ずっど私は観客に廻っていたらしい。

何年振りかに、また「おやっ」と思ったのは「泣虫小僧」の演技だった。パーソナリティだけが売物のテレビの風潮の中で、女優になっっている彼女を発見した時は嬉しかった。お人形でない「女」がいた。作家として、その人のために書いてみたい女優がいたといい。それは私だけではない筈である。

大衆芸能賞

(演芸部門)

東京落語会

NHK



桂文楽師



春風亭柳橋師

東京落語会

昭和34年、当時不振であった落語界への助成と伝統話芸の育成を願って、NHKが落語協会、日本芸術協会によびかけ、NHKサービスマスターの四者が共催で同年7月に第一生命ホールで第1回の公演を開いた。

その後、35年1月からヤマハホール、45年1月からイイノホールと、それぞれ会場を変更し、今日まで12年間、百四十回の公演を続けて来たが、常に、すぐれた古典落語の上演と共に新作落語に積極的な努力を注ぎ、毎年芸術祭に参加して数多くの賞を受けている。

東京落語会

を讃える

内山惣十郎

四十五年度の放送演芸は、正直言ってこれという目ぼしいものはなかった。

最も活躍した落語家は、芝居噺を十二巻の映画に製作した林家正蔵だといえよう。だがこれは、放送演芸とは別なので、決定打とはならなかった。最近話芸の進境目覚ましい金原亭馬生が、CMも司会もやらず落語一筋に打込んでいる態度は立派だと、推賞する委員もいた。その他柳家小さん、てんぶくトリオ、浪曲の玉川勝太郎、女流漫才のかしまし娘など、委員の意見はなかなか一致せず、遂に決戦投票ということになって、結果は、東京落語会が最多票で優勝をさらった。

三十四年スタート以来十二年、一四〇回余の公演を重ね、とかくずれがちな古典落語を守り続けると共に、毎回新作落語も加えて、それを録音録画して、ラジオにまたテレビに放送している功績は頗る大きい。今後も十年二十年と、続けて貰いたいことを切望する。

大衆芸能賞

(ショー部門)

糸居五郎

ニッポン放送



糸居五郎(いとい・ごろう)

大正10年東京生れ。昭和15年新京の和田英学院卒業。翌年満洲放送アウンサー募集に応募、三百人に一人の難関を突破して合格、アナ生活のスタートをきる。終戦は外地で。

昭和22年引揚げ、民放開始と共に放送界に復帰、近畿放送を経てニッポン放送に深夜番組担当のアナとして入社。以来、DJを中心に舞台の司会、音楽関係紙誌への執筆などを続け現在に至る。その間、海外視察取材五回。

本年1月17日50回目の誕生日に50時間マラソンDJスタート、見事完走して話題になる。現在「オールナイト・ニッポン」「ゴー・ゴー・糸居五郎」などを担当。

ラジオを

再認識する

小島 貞二

ショー部門は、候補者が、多彩にわたり、混線であったが、結局多数決で糸居五郎が推された。

ともすればテレビのゴールデン・タイムが独占してるかのようなショー番組の中にあって、ラジオの、しかも深夜という時間の中で地味な活躍を続けるこの人がえらばれたことは、ラジオへの関心をもう一度高める意味において貴重であると思う。この賞は、決して大衆の人気投票ではないのである。

五十歳の誕生日を記念しての五十時間にわたるマラソン・ジョッキーも、むろん評価の対象になったが、要はワンマンDJの草分けともいえるこの人の終始かわらぬ情熱と、そして話術にある。

糸居さん、おめでとう。

CM作品賞

ハウスジャワカレー

ハウス食品工業(株)



品位ある

ユーモア

やなせ・たかし

ハウスジャワカレーのCFのすばらしいところはシニカルなユーモアにある。激烈なウーマンリブの時代なのに、しつしつと目八分にカレーをささげもってきた女房に、この亭主はにこりともせず、洗面つくって「うまい！」とほめる。女房のほうもまた表情をかえずしとやかに台所に去るが、ひとりになると突如女房大いによるこび、シェーをしてとびあがると、ストッブモーションになり、ピシッときまる。小気味よく爽快感がある。短かいがひとつのドラマがある。近來の傑作であらう。

ユーモアはCMにも欠かせない要素だが、ややもすると俗悪におちて品位をおとす。その点、ハウス食品のこのCMのユーモアは、良質なのに子供にも解る大衆性もある。そしてまた実に日本的なところがすばらしい。国籍不明になり勝ちな風潮のとき、うれしい。

設立 大正2年
 資本金 6億5千万円
 本社 東大阪市御厨二二七
 社長 浦上郁夫

同社のインスタントカレーの市場シェアは45%で業界トップ。
 同社は、従来CMで、いしだあゆみ、ピンキーなどのヤングムード、河内桃子、大空真弓などの恋人・若妻ムードを訴えてきたが、ジャワカレーのCFに關しては「おとなの愛」ムードをかかげ、伊丹十三、続いて伊丹・宮本夫妻を起用した。

制作代理店 大阪電通

受賞者一覧

日本放送作家協会賞

第一回(36年)

企画賞「日本の素顔」(NHK)

演出者賞 せんぼんよしこ(NTV)

男性演技者賞 松村達雄

女性演技者賞 黒柳徹子

スポンサー賞 東京芝浦電気株式会社

TRG賞 和田勉(NHK)

サンキュー賞 文化放送本社受付一同

第二回(37年) 館野淑子(TBS受付係)

企画賞「兼高かおる世界の旅」(TBS)

演出者賞 山田智也(ABC)

男性演技者賞 ハナ肇とクレージーキャッツ

女性演技者賞 池内淳子

スポンサー賞 株式会社資生堂

TRG賞「娘と私」番組関係者(NHK)

サンキュー賞 東京新聞ラジオテレビ欄

第三回(38年) 企画賞 中川忠彦(NHK)

演出者賞 田甫一郎(NHK)

男性演技者賞 橋本信也(TBS)

女性演技者賞 若田伸介

スポンサー賞 三共株式会社

TRG賞「夫婦百景」(NTV)

サンキュー賞 東京放送劇団

特別功労賞 吉田秀雄

第四回(39年) 企画賞 大映株式会社テレビ室

演出者賞 八橋卓(NET)

男性演技者賞 山口淳(NHK)

女性演技者賞 藤田まこと

スポンサー賞 古今亭今輔

TRG賞「おかしな話」(TBS)

サンキュー賞 セイコー企業CFの製作スタッフ

第五回(40年) 企画賞「風雪」(NHK)

演出者賞 久野浩平(RKB毎日)

男性演技者賞 今福正雄

女性演技者賞 南田洋子

スポンサー賞 近畿日本鉄道株式会社

TRG賞 梅本重信(NHK)

サンキュー賞 「チロリン村とクルミの木」関係者一同

第六回(41年) 企画賞「日産スター劇場」(NTV)

演出者賞 「日本の謎」(毎日放送)

男性演技者賞 岡山尚幹(フジテレビ)

女性演技者賞 長門裕之

スポンサー賞 「お笑い三人組」関係者(NHK)

TRG賞 「FM名作劇場」(NHK)

サンキュー賞 「木島則夫モーニングショー」

特別賞 司会者トリオ(NET)

CM作品賞 「文明堂豆劇場」(文明堂)

サンキュー賞 「お天気ママさん」(TBS)

第七回(42年)

最優秀番組賞「現代の映像」(NHK)
演出者賞

テレビ部門 今野勉(TBS)

ラジオ部門 田辺春夫(NHK)

男性演技者賞 中村錦之助

女性演技者賞 佐藤オリエ

大衆芸能賞 獅子てんや・瀬戸わんや

CM作品賞 バイロット万年筆株式会社

新人脚本賞 渡辺やえ子「町」「バラのど

げ」

同 蕪木利代「賽の河原の鬼」

第八回(43年)

最優秀番組賞「広島原爆三部作」

(広島テレビ)

演出者賞

テレビ部門 小川秀夫(フジテレビ)

ラジオ部門 沖野 暲(NHK)

男性演技者賞 渥美 清

女性演技者賞 渡辺美佐子

大衆芸能賞 桂 米朝

CM作品賞 「トヨタカローラ」

(トヨタ自動車販売)

新人脚本賞 戸麻竜悟「うたてなや」

第九回(44年)

最優秀番組賞「ひよっこりひょうたん島」

(NHK)

「私の昭和史」

(東京12チャンネル)

演出者賞

テレビ部門「ボラ名作劇場」

演出者グループ(NET)

ラジオ部門 香西 久(NHK)

男性演技者賞 川崎敬三

女性演技者賞 栗原小巻

大衆芸能賞 一竜斎貞鳳

CM作品賞 「純生は生きている」

(サントリー株式会社)

第十回(45年)

最優秀番組賞「題名のない音楽会」

(NET)

「朱鷺の墓」(NHK)

演出者賞 柳下英彦(東海ラジオ放送)

男性演技者賞 金田竜之介

女性演技者賞 森 光子

大衆芸能賞 コロムビア・トップ

CM作品賞 「カルピス」

(カルピス食品工業株式会社)

久保田万太郎賞

第一回(39年)

毛利恒之「十八年目の召集」

寺山修司「犬神の女」

第二回(40年)

茂木草介「兔追いし」「ニューヨークの

日本人」「逃亡者」

第三回(41年)

該当なし

第四回(42年)

高橋玄洋「いのちある日を」(NET)

小野田勇「おはなはん」(NHK)

第五回(43年)

阪田寛夫「花子の旅行」(TBS)

第六回(44年)

該当なし

協会賞選考委員

優秀番組賞 委員長 久板栄二郎

委員 伊馬春部 内村直也 内山惣十郎 岡本

克巳 米宮洋一 寺島アキ子 西島 大野口

いさを 羽柴秀彦 宮田達男 村田修子

演出者賞 委員長 伊馬春部

委員 江上照彦 田井洋子 高橋玄洋 水原明

人 山下与志一

男女演技者賞 委員長 岡本克巳

委員 宇津木澄 門川美代子 近藤若葉 西条

道彦 阪田寛夫 柴英三郎 松本重美

大衆芸能賞 委員長 内山惣十郎

委員 大野 桂 金田達夫 神津友好 小島貞

二 鈴木みちを 野口いさを 福井貞則 松浦

泉三郎

CM作品賞 委員長 やなせ・たかし

委員 門川美代子 狩野 新 米宮洋一 佐々

木陽子 本庄一郎 宮田達男 若尾徳平

協会賞式典委員会 委員長 大林 清

委員 西沢 実 宇津木澄 門川美代子 狩野

新 米宮洋一 神津友好 水原明人

《コーセーの最高級化粧品シリーズ》

アルファート

美しいお肌をつくる——
これがコーセー化粧品の
ライフワークです



☒ コーセー化粧品

発行 社団法人 日本放送作家協会
港区六本木 六ノ二ノ五 原ビル

編集 日本放送作家協会 広報委員会